

先生、それは治療で
すか——不眠症の主治医に
心も身体も診られて、
朝まで処方箋をも
らい続けています

冷たい聴診器が胸に触れた瞬間、身体の芯がきゅっと疼いた。

「——深呼吸して」

逢坂先生の低い声が、防音の診察室に沈む。三ヶ月通い慣れたはずの空間。なのに今日は先生の指が聴診器の位置を直す、たったそれだけで心臓がばくばく跳ねて止まらない。

「桐谷さん、心拍が速いですね」

「……すみません、ちょっと」

「謝らなくていいです」

フレームレス眼鏡の奥、切れ長の目が私を射抜いた。カルテじゃない。私を、見ている。その視線だけで首筋まで熱が昇った。肌が薄いから、きっともう赤い。全部バレている。

「最近の睡眠はどうか」

「少し……マシ、です」

嘘。全然眠れていない。でも「大丈夫」と言い続けることでしか自分を保てなかった。職場では後輩のミスを被り、上司には叱責され、夜は布団の中で天井を睨むだけの日々。

先生がキーボードから手を離した。椅子ごとこちらを向いて、少し身を乗り出す。

「桐谷さん。眠れない夜——何を考えていますか」

息が止まった。

何時に寝てますか、は訊かれた。何時間眠れましたか、も。でも「何を考えているか」を訊いた人は——この人が初めてだ。

「……別に。何も——」

声が、震えた。自分でもはっきり聞こえるくらい。

先生はそれ以上追わなかった。「無理に答えなくていいです。でも、ここではどんな答えも正解ですから」と、あの低い声で静かに言った。

帰りのエレベーターで、自分の胸に手を当てる。まだ速い。不眠の症状じゃない。もっと別の——名前をつけたくない何か。

あの声が、耳の奥にこびりついて離れなかった。

*

二週間後の診察日。ドアを開けた瞬間、自分がもう限界だって分かっていた。

後輩のシステム障害を三日間ほぼ不眠で処理した。上司は「お前がしっかりしてれば」としか言わなかった。身体は動く。頭も回る。でも胸の真ん中にぽっかり穴が空いて、そこから何もかもが抜け落ちていく感覚が止まらない。

「お変わりありませんか」

先生のいつもの問いかけ。私はいつものように口を開いた。

「大丈夫——」

言えなかった。代わりに、涙がこぼれた。

自分でも驚いた。こんなところで。この人の前で。止めなきゃ。

止めなきゃいけないのに、次から次へと溢れて、嗚咽が喉を突き破る。

先生の手が一瞬、宙で止まった。

次の瞬間、椅子のキャスターが静かに滑る音がして——大きな掌が、私の頭に置かれた。何も言わない。ただゆっくり、髪を梳く指。

「ず……っと、大丈夫じゃなかったんです」

絞り出した声は自分のものとは思えないほど掠れていた。

「知っていました」

なのに、頭を撫でる手にだけ微かに力がこもる。

「最初の間診のときから、桐谷さんの"大丈夫"は嘘でした」

——バレていた。ずっと。それなのに追い詰めず、三ヶ月もの間、待っていてくれた。

その事実が、涙をもっと溢れさせた。

「泣けるのは回復の兆候です。安心してください」

先生の指がもう一度、髪を撫でる。耳の後ろに指先がかすめた一瞬——背筋にぞくりと甘い電流が走った。泣きながらそんなことを感じている自分が、信じられなかった。

＊

それから二週間。少しだけ、眠れるようになった。先生の前で泣

けたことで、胸の底に詰まっていた塊がほんの少しだけ溶けたのだと思う。同僚に「顔色いいね」と言われた。

通院日。診察室に入ると、先生がいつものようにハーブティーを淹れてくれていた。カモミールの甘い匂いが鼻腔を擦る。防音の壁に囲まれた密室に、先生の声だけが響く。世界から切り離された、二人だけの空間。

「少し眠れるようになりました」

先生の目がほんの僅かに細まった。笑顔じゃない。けれど瞳の奥がふっと柔らかくなる。その変化を見逃さなかった自分に気づいて、慌ててカップに視線を落とした。

帰り際。「桐谷さん」と呼び止められた。

「何かあったら、診察日以外でも連絡してください。クリニックの電話は僕に転送されますから」

先生がいるから大丈夫。——そう唱えた。主治医への信頼。それ以上の名前は、まだつけない。

＊

「自律神経の乱れが筋緊張に出ている可能性がありますね。少し診せてください」

次の通院日。肩凝りと頭痛がひどいと相談した私に、先生はそう言って椅子を近づけた。

指が首筋に触れた。

「っ……」

手袋をしていない。先生の素肌が、直接首筋に当たっている。胸鎖乳突筋を辿る指先が、体温ごと流し込んでくる。じわり、と熱が広がって息が詰まった。

「ここ、張っていますね」

「はい……」

返事をしながら、先生の指の温度を必死で追っている自分がいた。長い指。静脈の浮いた手の甲。タートルネックの袖口から覗く手首。医師の手。なのに――

「桐谷さん。脈拍が上がっています」

血が一気に顔に昇った。

触られて動揺していることが、脈で読まれた。心療内科医の観察眼に、身体の反応が丸裸にされている。

「……先生はずるい。私のこと全部知ってるくせに」

口をついて出た言葉。言ってから凍りついた。

先生の手が止まる。一拍の沈黙。そして――低い声。

「全部じゃない。まだ、診てない場所がある」

空気が変わった。

聴診器が外される。先生の指が鎖骨を辿り、ブラウスのボタンひとつ分の下へ滑った。触診では絶対にはない角度。あり得ない圧。ゆっくりと――撫でるように。

「せ、先生……？」

「……心音を聴きます」

嘘だ。聴診器はもう首にかかっていない。

なのに逃げなかった。逃げられなかった。先生の指が鎖骨の窪みに沈んだ瞬間、自分の唇から甘い吐息が漏れるのが分かった。

「ん……っ」

先生の瞳が揺れた。一瞬だけ。でも確かに。あの冷静な目に、熱が灯った。

指がブラウスの合わせ目を辿り、胸の上辺にかかり――

止まった。

先生が目を閉じて、深い息を吐く。指が私の肌を離れた。

「……すみません。今のは不適切でした」

椅子を戻す。姿勢を正す。カルテに何か書き込む。声は落ち着いて聞こえる。でも、さっきより僅かに掠れていた。

「次回は二週間後でいいですか」

「……はい」

胸の奥で、二つの感情がぶつかった。安堵――先生はちゃんと線を引いた。やっぱり信頼できる人だ。

そして、もっと深い場所から込み上げる失望。あの手が止まった瞬間、身体の内奥で何かが「もっと」と叫んでいた。

エレベーターの中で自分の身体を確認した。首筋に先生の指の温

度が残っている。鎖骨の窪みが、触れられた場所だけ熱い。

下着が——濡れていた。

「私、先生に触られて——」

認めたくない。認めたくないのに、身体は嘘をつけない。不眠症よりもずっと厄介なものを、抱え込んでしまった。

*

深夜二時。布団の中で目を開けていた。

一週間、先生の手を思い出すだけで心臓が暴れる。先生の声が脳内で何度も再生される。「まだ、診てない場所がある」。その言葉が熱い棘みたいに胸に突き刺さったまま、抜けない。

身体が火照る。鎖骨に自分の指を当ててみた。先生が触れたのと同じ場所。でも何も起きない。自分の指じゃ全然足りない。

スマートフォンに手が伸びた。クリニックの番号。先生は「診察日以外でも」と言った。でも深夜二時に。こんな理由で。

指が震えている。

——通話ボタンを、押していた。

三コール。

「——桐谷さん？」

低い声。少し掠れている。寝起きかもしれない。その声だけで、下腹がきゅっと疼いた。

「すみません、こんな時間に……眠れなくて」

「いつからですか」

「一週間、ずっと」

「……何か、きっかけは」

分かっているはずだ。訊くまでもなく。でも言えるわけがない。
先生に触られてから身体がおかしいだなんて。

沈黙。

受話器越しに先生の呼吸が聞こえる。ゆっくりとした吐息。それから――

「――来なさい」

敬語じゃない。「来てください」じゃない。来なさい。

背筋を電流が貫いた。

「クリニックは開けてあります。三十分で来られますか」

返事をする前に、もう布団を蹴っていた。

＊

非常灯だけが灯る廊下を歩いた。自分のヒールの音がやけに大きく反響する。診察室のドアを開ける。

先生は白衣を着ていなかった。

ダークグレーのタートルネックにスラックス。眼鏡だけがいつも通り。白衣がないだけで、こんなにも——男の人の身体をしていたのだと思い知らされた。肩幅。腕を覆う筋の輪郭。白衣の下にずっと隠れていたものが、間接照明に浮かび上がっている。

「座って」

指し示されたのは診察用の椅子じゃない。壁際のソファ。間接照明だけの診察室は昼間と全く違う空間に変わっていた。防音の壁。外界から隔絶された密室。

先生が隣に座った。昼間とは比べものにならない近さ。膝と膝が触れそうで、先生の体温が空気越しに伝わってくる。

「眠れない原因、言えますか」

俯く。

「……言ったら、先生は困りますか」

「僕はもうとっくに困っている」

先生の指が顎にかかった。顔を上げさせられる。至近距離で目が合った。眼鏡の奥の瞳が——こんな色をしていたなんて知らなかった。暗い焦茶に、間接照明の灯りが二つ揺れている。

「原因は僕だろう。——分かっていて呼んだ」

息を呑んだ。

「あの日から、桐谷さんの脈拍データがおかしかった。来院時の血圧が毎回跳ね上がっている。瞳孔も開いている。身体は全部教えてくれる。嘘をついているのは——ここだけだ」

先生の指が唇に触れた。かさついた指先が下唇をなぞる。

もう嘘はつけない。

「先生が身体を診れば分かるって言うなら——」

自分でも信じられない言葉が喉を滑り落ちた。

「……全部、診てください」

先生の目が一瞬だけ見開かれた。それから細く息を吐いて、ブラウスのボタンに指をかける。

一つ。二つ。三つ。

まるでバイタルサインを測るみたいに丁寧に。けれど指先が微かに震えている。それに気づいた瞬間、胸の奥で何かが壊れた。この人も——同じだったのだ。

「ここに触れると心拍が上がる」

鎖骨を撫でられて、喉の奥から吐息が零れた。

「ん……っ♡」

「ここは——もっとだな」

ブラジャーの薄い布越しに、先生の指が乳首を弾いた。腰がびくっと跳ねる。

「やっ……」

「声を殺さなくていい。この部屋は防音だ」

その一言で全身の力が抜けた。防音壁。間接照明。外の音が一切